

「根っこ」序説Ⅱ：夢・接近と反復：島尾敏雄  
「孤島夢」をきっかけとして

Breaden, Barnaby  
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

<https://doi.org/10.15017/8455>

---

出版情報：九大日文. 3, pp.36-46, 2003-10-31. 九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会  
バージョン：published  
権利関係：



# 「根っこ」序説 II

——夢・接近と反復——

島尾敏雄「孤島夢」をきっかけとして

バーナビー ブレーデン

Barnaby Breaden

「南島」についての語られ方と、「夢」についての語られ方とが似ている。このあまりに異質な二つの対象は、どちらも近代及び現代の様々な言説空間に於いて《根っこ》として機能する。「夢」も「南島」も、序列化と帰属化の認識論に於いてより深く、古く、純粹で貴重な何かに通じる扉（通路・管・鏡）として記述される。この何かとは、「私」の深層だったり、「私たち」のルーツだったりするが、常に私（たち）の意識の中心から遠隔のものとなされる。「異」の「原」（「深」「古」）に於ける吸収・理解・同化は《根っこ》的パロールの根本原理である。

以下は本誌第一号に載った拙論の続きであり、「《根っこ》序説」という論考の第二部である。論考全体を通して、日本の近代に於いて「南島」の言説と「夢」の言説とが似ているという素朴な感想をきっかけとして、明治期以降の思想、文学、心理学、言語学、民俗学、哲学などにおける或る間言説的運動の跡を追って、その出発点と可能性を考える。様々な異なった言説分野を貫くこの運動を引つ括めて《根っこ》と呼ぶことに

した。前回の論文に於いて極めて抽象的な形でふれたこの運動を、今回以降に於いて個別的かつ具体的に考え、「《根っこ》とは何か」という問いの可能性を様々な方向から探っていききたい。

明治中期辺りから「夢」の概念も、「南島」の概念も様々な言説領域に於いて大きく変わった。比較言語学、考古学的言説の普及、一般心理学の発生や日本と沖縄の地政学的認識の変化などはこの概念の変化に関与した。《根っこ》としての機能はこの概念の変化に伴って生まれた。

この機能が歴史的な広がりをもつ限りに於いて、「《根っこ》の「エポック」という言い方ができるかもしれない。そして、現在の私たちも《根っこ》のエポックから脱し得ていないことは、「ルーツを探る」「掘り下げる」「底流」「深層」など隠された（埋もれたまたは忘れられた）意味の発掘＝解明を示すメタファーが、文化・文学研究に於いて「真実」を統御するものとして一定の権威を示し続けている事実から察せられるだろう。《根っこ》の外側には立てない。

そうだとすれば、どのように考えれば良いのか？ 方法は二つある。一つは《根っこ》の歴史化である。ここでいう歴史化とは、《根っこ》の原型を求めることでも、「《根っこ》以前の思想を発掘することでもない。寧ろ、「《根っこ》の運動が発生した文脈やその誕生の瞬間に注意する、或いはその発生を可能にした政治思想的状況に注意することである。いま一つは《根っこ》の運動を最も明白に示す各言説が、自らの内的発展や言葉の流れに於いてあらわしている余剰の意味、アポリアや他者性に注

意すること 言い換えれば、その脱構築する姿を追いかけることである。本稿では、この二つの方法を並行して用いることにしたい。

「夢」と「南島」とが似ているというのは、沖縄が夢のような場所であるなどという意味ではない。ここで鈎括弧に制御された「夢」と「南島」はどちらもフィクションである。

今回及び次回の課題は、「夢」という記号表現が近・現代日本思想に於いてどのような文脈で使われていて、どのように機能するか調査することである。その意味に於いて私の主題は「夢」のものではない。「ここで問題にしたいのは「夢」の記述であり、「夢」概念の変遷である。「夢」とは、様々な間テクスト的言説体系に編み込まれた記号表現である。「夢」と書く時に指示される現象は、心的というよりは寧ろ言説的な出来事である。以下述べるように、精神分析学・分析心理学にとつての「夢」は悉く語りの記録（記述）であるが、占夢術、神学、幻想文学、和歌などといったジャンルに於ける「夢」も同じように、常に、そして既に「書エクリチュールき」（読む行為を含めての「書エクリチュールき」という空間に於ける存在である。この意味に於いて「夢」はフィクションである。

近代に於ける「夢」言説の展開は実体性の否定から始まった。認識論の対象としての「夢」は、進化論の構造に於いてより純粹、本来的で原始的なものに通じる認識として再発見される。この再発見は「夢」に対比される「うつつ」との序列化をも意

味する。つまり、「異」を表わす「夢」は現実認識の差異として、しかも現実認識の「原」に通じる《根っこ》として再発見され、原・認識として帰属化される。なお 後に述べるように「夢」概念に於ける序列化、再発見と帰属化という過程・処理はその記述のあり方に於いて反復される。この過程・処理を今回及び次回の論文に於いて問題化する。

#### アフローチ 接近

夢の中では私は一隻の小型の戦闘艇で広い海原を航海しているのであった。それは魚雷艇のようでもあったが、そのように装甲の脆弱なものではなかった。（中略）私はその戦闘艇の艇長で、言葉遣いは荒々しく、六、七名の艇員に君臨しているのであった。（中略）つと私は島影を認めた。島嶼の付近は水路が分かっているも十分注意しなければならぬ。一応はいつも初心者のように細心でなければいけない。私はその島を避ければよかった。そして、おもいかし、とか何とかゆったり大廻りに、そんな島に近よらなければよいと内心思っていたのであったが、つい艇はどんどん島に近づいてしまったのだ。号令をかけ損なうと、そのきっかけを失い、事態は急に眼の前にやってくる、あれであった。<sup>2</sup>

島尾敏雄の短編小説「孤島夢」（一九四六）の書出しの中で、長い修飾文のしまいに来る「あれであった」という言葉は何を

示しているだろうか。注意深い読者はここで躊躇する。「あれ」の代名詞はいった何を指し示しているのか？注意深い読者は「あれ」の暗示する内容を見逃してしまつたのではないかと思ひ、その前の文章を読み返してみる。「あれ」は隠語のようにも感じる。文章のリズムに於いてあまりに大きな統辞論的重みを担う「あれ」の陰に隠れている意味を、読者はテクストの中で何とかして突きとめようとする。しかし気づいた時には「あれ」はもう過去になつてしまつていたのである。「号令をかけ損なうと、そのきつかけを失ひ、事態は急に眼の前にやつてくる、あれであつた」という文を読み終わつた時点で、「あれ」の陰は既に視野を遮り理解を遮断した。

注意深い読者はテクストの「外部」に視点を移し、「孤島夢」が一九四六年十月に三島由紀夫・庄野潤三等との同人誌『光輝』に発表された事実や、その作者が特攻隊長として奄美群島加計呂麻島で出撃の最終命令を待ちながら敗戦を迎えた事実を「あれ」の重みに釣り合わせようとするかも知れない。私たちは確かに「戦争の記憶」というような「深層」を想定して小説を読む衝動を感じる。しかしテクストに参加する「私たち」だけの了解に語りかける「あれ」が「外部」の事実に基づいて捉え得るとは考えがたい。「孤島夢」の「あれ」は記憶をあらわしている限りに於いて、それは寧ろ読書行為に於ける記憶の裏切りと逆転であろう。気づいた時には「あれ」という「事態」はもう既に起こつてしまつていたのである。

問題は「距離」のはかり方にある。

送信者側に属するこれでも、受信者側に属するそれでもない「あれ」という代名詞の発話行為は送・受信者と目的語との間に距離を作り出す。「ほら、あれを見てみる」。代名詞の機能は、暗黙のうちにも、受信者との既成の了解を前提として成り立つ。代名詞「あれ」は私にも、あなたにもわかる第三者であり、「私たち」の対話を親密なものにしてくれる。一方「孤島夢」の読者には「あれ」の見覚えがない。「あれであつた」は過去形の語りであるが、しかしテクストの空間に於いて「あれ」には過去はない。「あれ」は読者を語り手の立場に立つてみるよう誘つているようでもあるが、一方語り手と読者との間に理解のギャップをあらわす。解釈を保証してくれる既成の了解が存在せず、送信者の立脚地が定まらないこの「あれ」に直面した読者は寧ろ了解の可能性から疎外されてしまふ。「あれ」が隠語のように感じるのもこのためだろう。なにげに親密で、なにげに冷たい言葉である。

語りは続く

鳥影は急速に大うつしになつて来て舵をとる間もなく、又突発の危険に対して機関を停止させるか後進をかけるか何かの機敏な処置をとる瞬間を失つた。(中略)全島は砂浜で出来ている。(中略)私は総毛立つ気がした。そつだ。この鳥こそ、人の噂にきいていたあの鳥ではないか。(中略)その島に私は来ているのであつた。私は前々からその島は呪詛を受けている島のように考えていた。(中略)私は必ずその島にひきよせられて、私の宿命は固定されてしまつて

あるつといつ不安があつた。そしてそれがその通りになつたよつである。<sup>3</sup>

「あれ」は「そんな鳥」が「あの鳥」に変わる瞬間である。

「あれ」は呼びかけである。(「こゝでいう呼びかけの機能については、本誌第一号に於ける拙論で詳述する。)…呼びかけは距離を表わす。(中略)呼びかけはその主題を可能性として顕現する。)距離を作り出すとともに、あの事態を不可避のものとして一気に到来させる。「あれ」は過去から未来に向かつて発せられる言葉だけれど、「あれ」は予言などではない。何も暗示しない。ただ、気づいた時には「あれ」はもう既に「あの鳥」を私たちの鼻の先まで運んできているのである。距離を作り出すと共にそれを一気にとびこえ、過去の中からこれから到来すべきものを到来させたのである。「号令をかけ損なうと、そのきつかけを失い、事態は急に眼の前にやってくる。あれであつた。」始めは仮定形としても読まれるこの文の最後には、あの事態の到来は既に確実である。「あの鳥」の到来という「やって来る、あれ」は遠隔なものでも親密なものとして、身にまとわる切迫感と空間識失調のようなどつしよつもない不安をテクストの中に運んできている。

この矛盾する距離のあり方をどのように捉えれば良いだろうか。この問題を考える第一の手がかりとなるのは、小説をフレームする「夢の中では」という「場」である。

## 「夢の世界」と遠近法・見通し<sup>4</sup>

寿草林<sup>じゆうそうりん</sup>という林に法子<sup>ほつす</sup>という夢の賢者が庵をむすんでいた。

ある日法子<sup>ほつす</sup>は不思議な夢を見、三人の弟子を呼んでその内容を話した。「こゝから西へ約二百里行つたところに距被林<sup>きよひりん</sup>という林があり、その中に盗泉<sup>とうせん</sup>という泉がある。その泉のほとりには渴果<sup>かつか</sup>といつて、ひとつ食べれば寿命が五十年延びるといわれている世にも美味な果実をつける樹木が立つておる。」法子と三人の弟子は早速旅装をととのえ、渴果を探しに距被林に出かける。途中で同じ果実を探している大勢の百姓たちに会い、こつなれば盗泉に着く前に果実がすべて食べられてしまつたのではないかと不安になり、道を急ぐ。「かくて旅は法子たち四人と、村の者約八十人とが追いつ追われつの競争をするていとなつた。」ところが、夢の賢者である法子一連には意外な武器がある。「百姓どもは所詮法子たちになかなかつた。村びとたちが三、四十里歩いてはひと休みして睡眠をとるのに比べ、睡眠中も夢の中で目的地へと歩き続ける法子たち四人の速度はいうまでもなく倍に近い。」いよいよ距被林の盗泉に着き、既に熟している渴果の実を分けて食べる。ところが、実は水っぽくて甘味も香りもない。「ははあ、法子が弟子たちの顔を見まわした。『お前たちの中で、今が夢の中なのか現実なのか、知っている者はおらぬか。われわれは夢で歩き続け、目醒めてはまた現実を歩んだ。そのためわしには今現実かの判断をさせぬよつになつた』と、現実の美味を味わうためには現実に戻らなけ

ればならないと思いつき、早速横になって一休みする。再び目を醒まし、あらためて果実を食べてみると、なるほどそれは言い伝え通りの美味である。<sup>4</sup>

筒井康隆の「法子と雲界」(一九八八)のこのエピソードは、莊子の「胡蝶の夢」と同様に、「夢」と「うつつ」とを対称的なものとして並べているところに於いて読者は異様な印象を受ける。常に「うつつ」の中から「夢」の方を見ているという意識をもっている私たちにとって、「夢」と「うつつ」とを混同し得る可能性が面白おかしく感じる。

「うつつ」の中から「夢」を見るまなざしは即ち解釈のまなざしであり、発掘・解明の制度下に於いて「異」「原」「深」に對するまなざしである。言い換えれば、「夢」と「うつつ」の序列は、考古学的な序列として表現される。解釈のまなざしは必然的に序列を作り出す。「未開」と「文明」、「児童」と「成人」、「狂気」と「正気」を反復するこの「夢」と「うつつ」の序列化に於いて、「夢」はよりアルカイックなもの、より深いものに通じる認識として、発掘・解明の可能性を示す宝物として記述される。

近代日本に於いて「夢」概念が、明治中期以降の新しい「人間学」一般心理学、ロマン主義と自然主義、考古学や人類学の文脈において誕生した。特に、人間学の一環として明治日本の思想界に紹介されたターウィニズムが「夢」概念の再編成に関与した。このような「夢」概念の歴史には以下詳細に述べるが、その前に認識論に於ける「夢」「うつつ」の序列化

に於ける「距離」の機能にふれてみたい。

元良勇次郎の有名な総合的心理学入門書、明治四十年(一九〇七)四月に上梓された『心理学綱要』では、心理学の定義は「直接経験(純経験)」と「間接経験」とに於ける認識の区別から始まる。「直接経験」は心理学の研究すべきところとされ、「間接体験」は哲学や自然科学の領域に属するとされる。直接経験とは即ち「経験其のもの」であり、出来事に対する直接的な認識である。一方「間接経験」とは「直接経験した所の事柄を基礎として、夫に推理作用を応用して行く」即ち「経験の意味を考える」ことである。この差を示すのに用いられるのはやはり「夢」の例えにほかならない

然らば夢と現在との差異は何処にあるかと云ふと、経験の意味にあるのである。経験が指す所の意味を外部に実行するに当り始めて夢と現在との違ひが起つて来る筈であるに、感情生活にはそれ以外に意味はないから夢と現在との差はない。唯推理作用に至つては経験其のものと、経験が指して居る意味とを明らかに区別するのである。<sup>7</sup>

「夢」は「感情生活」に於ける「直接経験」として「意味」の生産過程から疎外され、解釈という二次的なプロセスによって初めて「意味」をもつ。言い換えれば、「夢」は解釈・判断という制度によって「意味」を与えられるものとして、従つて心理学の研究すべき対象とされる。推理による認識的な「距離」

を許さない「夢の世界」はそれ故に完全に肯定的な場所である。

以下触れるニーチェの人間学もそうだが、あらゆる実体性から疎外された「夢」の意味が問われる場合、その問いは必然的に存在論から認識論の方へと送り返されるのである。「墨子」に於ける夢の定義は印象的「臥而以爲然也」(臥して以て然りと爲すなり)であるが、プラトンも「何かに似ているものを、そのままに似像であると考えず、それが似ているところの当の実物であると思い違いする」と記述するように、「夢の世界」は直接的・肯定的認識(より正確に言えば認識的「距離」の欠如)として定義される。近代に属する事例をあげるとすれば、井上田了と共に「夢」の実体性という「迷信」の「改良」に努めた高島平三郎の「夢に関する考究」(一八九六)では、「夢みる人は、毫も顧慮する所なく、夢中の出来事を承認して、恠まざる事あり」という。フロイトも『夢判断』では「夢」の特質を「自分が考えてはいらずに、体験していると思ひ込んでいる(略)、つまり何の疑いも感ぜず、幻覚を承認し受け入れている」とし、「夢について」(一九五九)の埴谷雄高も「私達は、夢のなかで、殆ど疑いを失ってしまふ。(中略)眼前に現れるあらゆる事物は忽ちに肯定されてしまふ」と述べている。<sup>12</sup>

「このような直接的且つ肯定的認識は「夢」を「見る」という古いメタファーと葛藤しているようにも感じる。「見る」行為はある程度の客観性、ある程度の認識的「距離」を前提とするのではないか。「寢目」という語源にも反映されている「夢」の視覚性、「夢」の「距離」をどのように考えることができる

だろうか？

この問題は柄谷行人のエッセイ「夢の世界」(一九七二)のきつかけとなる

われわれは夢を見るとき、こういふ表現は正しくない  
ので、われわれは夢のなかで何も見ていない。見るとは「距離」をおくことだが、距離がないということが「夢の世界」の特徴である。<sup>13</sup>

このエッセイの副題は「鳥尾敏雄と庄野潤三」であり、(夢の世界) (鳥尾敏雄) (庄野潤三) という三部から構成されているが、ひとまずその第一部を問題にしたい。柄谷は「夢の世界」は人間は可塑的で創造的であるというような錯覚「に対する反駁を土台にして、反対に、過酷なほど明瞭、切実で「あまりにリアル」な感覚を伴う「夢の世界」を描き出す。そしてその実例を鳥尾・庄野の文学作品の中から見出ししていく。

エッセイの語りは次の件から始まる

夢についてわれわれはあいかかわらず神秘的な期待を寄せている。夢というのでなければ狂気や未開の思考といってもよい。ともかくそれらに理性的、合理的思考の硬直したゆきつまりを打開する可能性を見出すことは、シュールレアリスム以来の一般的な傾向である。だが、ここには錯覚が存在しないだろうか。

柄谷のいう「距離」とは、「実際の距離のことではなく、世

界に対する内的な関係のこと」であり、「距離をおいて」見るとは、世界をある「遠近法」によつて「客観あるいな客体」として見ることを意味する。「夢の世界」と「白昼の世界」との相違点はつまり「距離をおいて見ることができるか否かにある」。

夢のなかでは不可解なことにはなにもない。なぜなら、ここではわれわれはなにかを理解しようとはせず——すなわち対象化しようとはせず、たんに了解しているだけだからである。一瞬一瞬の了解はあるが、それらを結び付けようとはしない。<sup>14</sup>

ここにも『心理学綱要』と同様に、知的・間接的な「理解」と感覚的・直接的な「了解」との対比と序列が行われており、「夢」のあり方が絶えず認識論的な「距離」の構造へと送り返されていくのである。

ところが、柄谷行人のいう「了解」には、以上みてきた「墨子」、プラトン及び元良勇次郎のこの文章にない含みがある<sup>15</sup>。それは「夢」の思考である「了解」の原始性・本来性にほかならない。

「夢の世界」は認識的「距離」を作り出す「遠近法」とは無縁だが、これは「遠近法」の崩壊（打倒）を意味するのではない。「遠近法」は依然として覚醒時の「理解」を制御するが、夢の中の認識はまだその段階に達していない——夢の中で、「遠近法」を知らない「未開人」の精神状態が「ふり返す」のである<sup>16</sup>。また、「遠近法」の喪失した「狂人」もやはり未開人と同じ原始的

な暗闇の迷子にほかならない。目覚めは認識の進化であり、発狂はその逆転である。

無論、柄谷は実際の原始人や、実際の精神病患者の思考を指している訳ではない。しかし氏のメタファーは或る文脈では極めて現実性を帯びた思想の流れを組んでいる。柄谷のメタファーは、西欧の認識論に於いて著しい伝統を持つ。例えば、ニチエの人間学に於ける「夢」概念は広く知られている——

今でもなお旅行者は、どれほどひどく未開人が忘れがちであるか、どれほどその精神が記憶力の短い緊張のうちにあちらこちらとよるめきはじめたり、単なる気のゆるみから嘘やたわごとをいいたりするかということを観察するのが常である。しかしわれわれはみな夢の中ではこの未開人に等しい、粗雑な再認や誤った同一視が夢の中でわれわれの犯す粗雑な推理のもとである。（中略）夢の表現の实在性を無条件に信じるということを前提にすると、あらゆる夢の表象の完全な明瞭さは、幻覚が異常にしばしばあつて時には部落民全体・民族全体を同時に襲つた昔の人類の諸状態を、われわれにふたたび思い出される。したがつて、眠りや夢の中でわれわれは昔の人間の課業をもう一度経験する。<sup>17</sup>

以上ふれた論文「夢に関する考察」（『哲学雑誌』一八九六年）では、高島平三郎は福沢諭吉の文明論に代表される「野蛮の国」↓「半開の国」↓「文明国」の普遍的歴史観（『今世界の文明を論ずるに、欧羅巴諸国ならびに亜米利加の合衆国を以て最上の文明国となし、土耳



古、支那、日本等、亜細亜の諸国を以て半開の国と称し、阿非利加および  
太利亜等を目して野蛮の国と云ひ、この名称をもつて世界の通論となし<sup>18)</sup>  
に做つて、「夢」に対する考え方を三つのカテゴリーに区分す  
る——

①「客観的経験論」・多くの未開人は、夢中の出来事を以て、  
自己が睡眠中に経験せる実在として、疑はざるより起れる思  
想なり」。

②「神勅論」・広く宗教信仰者の間に行はれたるが如し。即其説  
によれば、夢は実在にあらざれども、未来の出来事、若くは  
自己の行為等に関して、神仏の告示するものとして信するな  
り」。「未開人の思想」ではあるが「客観的経験説に次ぎて起  
る。

③「主観的現象論」。夢を「自然方法」による心理的現象とし  
て見る、或は「医師及生理学者も、亦身体の病的状態より、  
其説明を企てたり」。これは「夢とは、完全なる客観的刺激  
の結果に由らずして、宛も客観的知覚の状態をなせる心的現  
象」という高島自身の定義と一致し、「文明国」に於ける「夢」  
概念とされる。<sup>19)</sup>

高島はこの三つの観点が同時代に於いて共存し得ることを認  
める——例えば②と③を聖人の夢と凡人の夢とする説にも注目  
する——しかし、最も広い意味での「夢」概念の共時態を想定  
することによって、逆に様々な「夢」概念を一つの進化論的分  
布図に組み入れて、更にこの系図を一本の物語として再編成し  
ていく。「世界」——「西洋」「我国」「支那」としての「世界」

——の文献を組み込んだ三つのカテゴリーは、一枚の思想的分  
布図を構成すると共に、また一本の進化論的系譜に収められて  
いくのである。なお、以下述べるように、同様な展開は柳田國  
男やCGユングなど殆ど異質な「夢」観に於いても繰り返され  
るのである。

このメタファーへの道を最も顕著に示すのは、ドイツの生物  
学者エルンスト・ヘッケル（ヘーケル）の進化論に於ける「生物  
発生の基本原則」である。つまり、「個体発生は系統発生の要  
約反復である」（個体は系統の進化に於ける各段階を経て成長する）と  
いう有名な反復論である<sup>20)</sup>。子供→成人への変化は「進化」で  
あり、人類の進化過程を要約反復する。

その解釈・延長として、「夢」や狂人の思考に於いて原始人  
の思考が「ぶり返す」。有名な例をあげるとすれば、フロイト  
はシュレーパー症例の「補足」に於いて「個体発生的に理解さ  
れた内容に人類学的に且つ系統発生的に把握された補足を付け  
加える」必要を主張し、次のように呼びかけている——

われわれが考古学と民族学研究の光によつて知ることが  
できるように、夢と神経症の中に野蛮な原始人を見出すで  
あろう。<sup>21)</sup>

ところで、日本の場合に於いてダーウィニズムそのものの発  
生をも意味する前近代的認識→近代的認識への変化が、未開人  
↓文明社会への進化を反復するという、もう一つの反復観念が  
存在する。以下詳しく見ていくように、この観念は昭和期後半

の日本文化研究に於いて、縄文 弥生と前近代 近代を重ねた特殊なルーツ探し言説の発生に於いて最も顕著であるが、柄谷の「夢の世界」でも確認できる。柄谷の「遠近法」は即ち「近代遠近法」に連結する概念である。「夢」に関わらないけれど「距離」をおかない言説の具体例は、「事実を精確に記述しながら、それを『意味』によって統御してしまわずに、その一歩手前で放置する」アイスランド伝説という前近代的・非・近代的認識に他ならない。<sup>22</sup>戦後文学の「深層」ブームに於いてもこのメタファーは一つの隆盛期を迎えた。「ひたすら考えつづけている私達の原始の思惟作用に由来する」埴谷雄高の「夢」<sup>23</sup>、「理性的な認識ではなく、人間の原初的な情緒として感受される」「深層意識の体験」という奥野健男の「夢」<sup>24</sup>などがその痕跡である。

この反復論の波紋は《根っこ》の運動を考えるための重要な手がかりとなる。なぜならば、反復論そのものは著しく樹木的である。この点については以下再びふれることになるが、ヘッケルの「原則」に限っていえば、福元圭太が指摘するように、比較言語学に於ける言語発生の系統樹をきっかけに発生し、系統樹のアナログーによって、進化の系統樹は明確なイメージと与えられるのである。<sup>25</sup>この図式は、言語学や精神分析学に限らず、人類学・児童心理学・地政学など様々な言説領域に於いて機能するが、このことと「夢」「南島」の関係については以下詳述する。

柄谷行人の言説に戻ろう。「夢の世界」の認識である肯定的な「了解」は「距離」の欠如を意味するが、一方「遠近法」の導入による「距離」をおいた客観的・懐疑的認識は「理解」と呼ばれる。私たちは目覚めてから「距離」をおいて、「遠近法」の向こうから「夢」を振り返る。「われわれは目ざめたとたん距離をおいて「夢の世界」を見る、つまり外側からそれを見る」<sup>26</sup>。目覚めることによって初めて「夢」を「理解」する。柄谷の「遠近法」とは、「ぶり返す」「了解」の「外側」として、「理解」という事後の反省を可能にする認識論であり、不透明な「了解」に対比される透視<sup>パースペクティブ</sup>の認識論である。遠近法による「理解」は覚醒の中から「夢」を振り返って、その「意味」を見透す。

目覚めた私たちは「理解」する。事後の「理解」は「夢」との時間的・認識論的な「距離」によって初めて可能になるが、一方「理解」は「距離」を一気にとびこえて「夢」の内容を「自己」という物語の中に編み込んでいく。目覚めの「距離」は「夢」の意味を私たちに近づけてくれる。「距離」の欠如を特徴とする「夢の世界」は目覚めという過程・処理<sup>プロセス</sup>によって私たちから隔てられると同時に、一方より私的なものとなる。

恐らく、問題は「距離」というメタファーそのものにあるのではない。寧ろ、そのメタファーが運んでくる「近い」「遠い」の概念が「夢」という《根っこ》を形容するのに適していないだろう。（ここでは「メタファー」という語に於ける「移動」「交通」の含みを考えたい。）《根っこ》は切断の痕跡をしるす。この切断

(こ)では喪失、埋没または忘却と呼んでもいい)は再発見の可能性として呼びかけられる。「異」は切斷(喪失・埋没・忘却)されたものとして、「原」に於いて吸収・理解・同化される。「夢」への旅、または「南島」への旅に於ける「距離」は、ただ「近い」「遠い」の概念で語れない。これらの「距離」は一種の状態変化とともに「理解」のまなざしを示す。

「孤島夢」の語りから流れ出る切迫感と空間識失調のような不安はこの「距離」の生産過程プロセッシング・処理の逆転を示している。接近を呼びかけるテクストへの接近アプローチは却つて不確かである。あまりに近距離に迫ってくる語りによつて、読者は逆に「理解」の視線を遮られ、不安を感じる。小説に於けるこの不安へのアプローチこそ次の課題となる。

次号では、「孤島夢」論の系譜・系統を糸口として、歴史的・文献的考察に入る。

### 【注記】

1 明治期以前の日本に於いて「夢」の実体性が必ずしも認められたわけでもない。しかし以下述べるように、明治く大正期「夢」論の多くでは、実体性の否定から始まる。近代以前の「夢」に於ける実体性については、カラム・ハリール『日本中世における夢概念の系譜と継承』(雄山閣出版、一九九〇年八月)が詳しい。

- 2 『島尾敏雄全集』第二巻(晶文社、一九八〇年)二四く五頁。
- 3 同上書、二五く六頁。
- 4 筒井康隆「法子と雲海」『葉菜飯店』(新潮社、一九九八年六月)。

5 「発掘」解釈については、『九大日文』第一号に於ける拙論で詳説する。

6 元良勇次郎はアメリカのジョン・ホプキンス大学でスタンリー・ホルの下で留学して、帰国後、日本初の心理学実験の授業を開いた人物である(佐藤達哉、溝口元ほか『通史 日本の心理学』北大路書房、一九九七年一月、八一頁)。今回の論文に於いて元良の著作に再びふれることになる。

7 元良勇次郎『心理学綱要』(日清印刷、一九〇七年)八頁。

8 「墨子」巻之十経上第四十二十四条、山田琢『墨子』下巻(明治書院、一九八七年六月)、四五〇頁。更に「臥」は「知の知る無きなり」(「知無知也」と定義される(同上第二十三条)。

9 『国家』第五卷第二十章476C、『プラトン全集』第一巻、田中美知太郎ほか訳(岩波書店、一九七六年一月)四〇二頁参照。

10 『哲学雑誌』明治二十九年四月号、二六一頁。

11 『フロイト著作集』第二巻「夢判断」高橋義孝訳(人文書院、一九六八年二月)四七頁。

12 『垂鈴と弾機』(未來社、一九六二年四月)三五く六頁。

13 柄谷行人『意味という病』(講談社文芸文庫、一九八九年一〇月)七三頁。

14 同上書、七六頁、七四頁、七七頁。

15 一方、以下見ていくように、この含みは高島平三郎、フロイト及び植谷雄高の言説にはある。

- 16 柄谷行人『意味という病』(講談社文芸文庫、一九八九年一〇月)六八頁、七二頁。
- 17 「人間的な、あまりに人間的な——自由なる精神のための書——」上巻、

- 1、十二)『ニーチェ全集』第六卷(第一期)白水社、一九八〇年一月)。
- 18 福沢諭吉『文明論之概略』初版一八七五年(岩波文庫、一九六二年一月)二四頁。
- 19 『哲学雑誌』明治二九年四月号、二六二〜七頁。
- 20 この「原則」は「人間的な、あまりに人間的な」の発行より一年前の一八七七年にドイツ自然科学者・医学者会議で行われた講演「綜合科学との関係における現代進化論について」に於いて発表された。その状況や内容について福元圭太「二元論の射程 エルンスト・ヘッケルの思想」及び「固体発生・系統発生・精神分析 エルンスト・ヘッケルの思想(2)」(『言語文化論究』13及び14、九州大学、二〇〇一年)が詳しい。
- 21 「自伝的に記述されたパラノイアの一症例に関する精神分析的考察」(一九一〇)、『フロイト選集』第十六卷、熊田正春・小此木啓吾訳(日本教文社、一九五九年四月)二〇五頁。
- 22 柄谷行人『意味という病』(講談社文芸文庫、一九八九年一〇月)七九〜八四頁。
- 23 「不可能性の作家」、『文学界』一九六〇年一〇月号。
- 24 奥野健男『文学は可能か』(角川書店、一九六四年五月)一四六頁。
- 25 「固体発生・系統発生・精神分析 エルンスト・ヘッケルの思想(2)」(『言語文化論究』14、九州大学、二〇〇一年)二〇頁。
- 26 柄谷行人『意味という病』(講談社文芸文庫、一九八九年一〇月)七三頁。
- 27 同上書七一頁。

(九州大学大学院博士後期課程二年)